

描くということ —表現の始まりと現在のしごと—

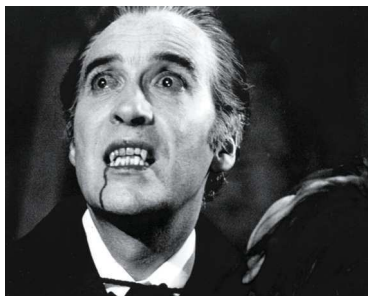
大沼 蘭*

The Act of Drawing —Early to Current Work—

Ran ONUMA*



4 歳頃の絵「ドラキュラをみた」



映画「吸血鬼ドラキュラ」より

画材が紙の上を滑って行く感覚や画面の中に空想の世界が広がるのを楽しむ「お絵描き」と仕事として絵を描くことの大きな違いは伝える相手（鑑賞者）を意識するかそうでないかの違いなのではないでしょうか。

両親と一緒に「吸血鬼ドラキュラ」をテレビで観たのは4歳頃だったと思います。あまりの恐ろしさに部屋から出て行くことも出来ず映画のあいだ中、殆ど目をつむっていたように思います。左上の絵はその翌日に描いた絵ですが、描くこと自体を楽しんでいたそれまでの絵と違い、生まれて初めて誰かに伝えることをはっきりと意識して描いたという意味で私の中で表現することの出会いになった特別な一枚です。裏面には映画を観た感想も綴っており、誰かに見せる時は必ずそれも一緒に読み上げていた記憶があるのですが改めて見ると全く意味不明の小さな図形のようなものが几帳面にびっちり横書きされているだけでなんとも不思議です。

作家活動を始めてからは自然と人間の関係性をテーマに制作しています。制作に取り掛かるときは自分が何に気持ちを動かされ、どう表現すれば見る人に伝わるかを考えるところから始めます。そうすることで自分が本当に創りたいものが徐々にはっきりとして来るのです。最近では19世紀の初めにイギリスで発明されたウォードの箱（Wardian case）という植物運搬容器を題材に作品を展開しています。

* おおぬま らん 相模女子大学学芸学部子ども教育学科 非常勤講師
国画会絵画部 会員

「ウォードの森 Wardian woods」

地球上の一つの種に過ぎなかった私たち人間は
ここ数百年で徐々に暴走を始め、到頭自分たち以外のあらゆる生き物にとって
自然な関係を築けない不自然な存在になってしまったのではないかと感じています。

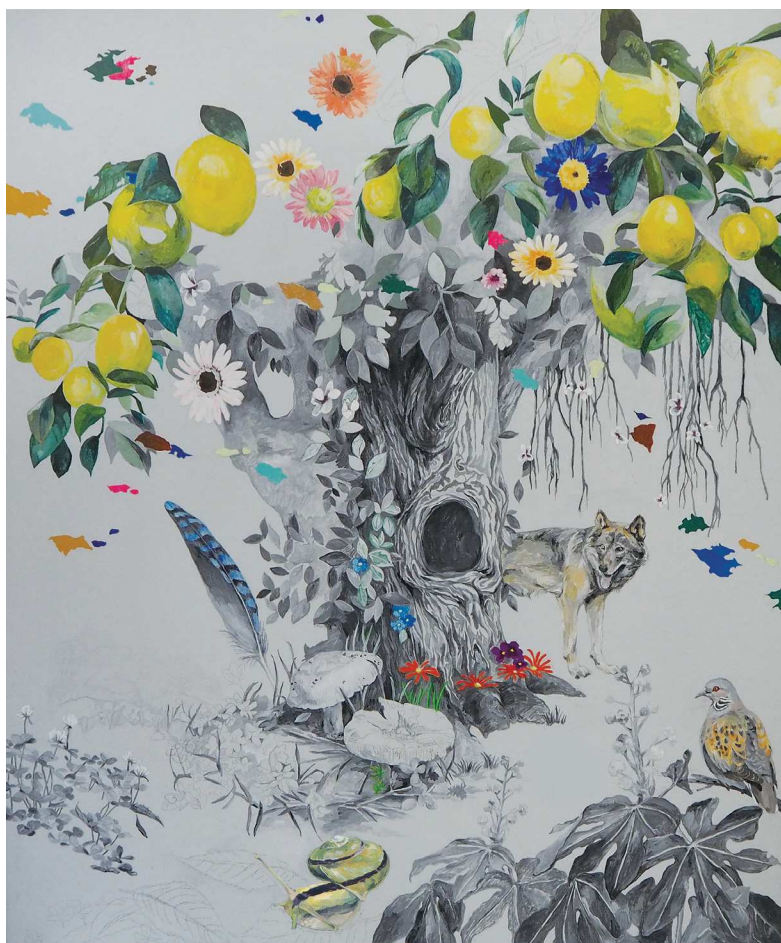
16世紀末頃から始まったと言われるイギリスの植物蒐集ブームは、熱烈な植物採集家だったウォード博士ⁱ
の発明した「ウォードの箱（ウォーディアン・ケース）」によって飛躍的に発展します。

博士の発明したガラス製の植物運搬容器は、急激な環境の変化と海水の飛沫から未知の土地の植物を守り
ながら世界中の珍しい植物をロンドンに集めることに成功しました。

それはまた、人々が生活の豊かさと引き換えに手に入れていた都市の大気ⁱⁱから
連れて来た植物たちを守る役割も果たしたのです。

僅かな空気と水分、ガラスを通して増幅された光によって
ケースの中の植物は新たな世界を創り始めます。
植物の根元に付いたまま偶然連れて来られた小さな昆虫の卵が羽化し、
死んで、また土に還ります。

隔離された小さな世界の植物は、かつてそれらが自生していた頃によく似た姿のまま、
私たち人間の無尽蔵な欲望によってまた別の少し奇妙な世界を生きるのです。



ウォードの森
2017年, 727×606mm
キャンバスにアクリル

- i ナサニエル・バグショー・ウォード（Nathaniel Bagshaw Ward 1791-1868年）は、外科医、発明家、園芸家。1834年にテラリウム（ウォードの箱 Wardian case）を発明した
- ii 1820年代のロンドンは石炭を燃やした煤煙とそこから生じた硫酸ミストによって植物が枯れてしまうほど大気が汚染していた